

情勢の特徴と我々の任務

情勢の特徴と我々の任務

更に、石油独占、トルコ復古、金独占を軸に反革命同盟の再編ノアケ国首脳会議のヘグモニーを奪い、世界市場の再編、構築の布石を打ち続いている。

しかし米帝匡主義が如何なる反革命共謀と種々の策動を企て様とも、才三世界解放斗争と社会主義国家の革命的前進を止める事はできない。今や、アジアに於ける民族解放斗争の前線は、朝鮮半島に移り、例え米帝が、朴に対する援助を継続し、米軍の駐留を再確認し、更に核供与を策動しようとも、朝鮮南部に於ける反米・反日・朴打倒の革命は不可避であり、押し止めることはできないかかる米帝の反革命戦略再編の下で、日帝の朝鮮侵略→反革命戦争への準備が着々とすんでいる。外相官沢の訪「韓」→なしくずし的金大中事件の着決付け||日「韓」閣僚会議の再開、三木訪米、シヨレンジヤー訪「韓」。訪日||坂田・シユレンジヤー会談、天皇訪米、キッシンジャー訪日||三木・キッシンジャー会談等々とめまぐ

るしい動きは、その布石である。

②日本帝国主義の高度経済成長の破綻とスタグフレーションの進行の中では、資本主義は行き詰り、広範なプロレタリアートの戦いが形成され、労働者運動の革命的高揚、更にはインドシナ完全解放から痛打を受け、動転し、国内統治の危機体制的危機が始まり、日本帝国主義がブルジョア階級独裁を維持・延命するには、外に對しては朝鮮侵略・反革命戦争を発動し、国内的には、民族主義・社会排外主義への統合、それへの純化たる天皇制ファンズム的統治形態への統治形態の転換を押しすすめなくては最早やつていけなくなつてゐる。日帝のこの様な動向に對して、端初的革命情勢は、逆流に抗し、更に大きなねりを形成しつつある。資本主義は全ゆる所でいき詰り、人民の怒りがうすまき、独占資本、金融資本に対する斗いは激化している。ブルエタリア階級の斗争は、被差別部落大衆、被抑圧小数民族、寄せ場、社外工、臨時工、中小零細企業の労働者などの下層を中心いて激化し、社「共」・カクマル等の経済主義・議会改良主義を乗り越えつつある。

日帝は、アーロン・タリア隣級を主体とした情勢の急速な変遷に對し、激化に対し、ファシズムへの道を目指し、統治形態の転換を開始している。首都圏での反革命統治を狙つた自衛隊の増強、治安体制の強化、議会の空洞化、行政・官僚執行権の肥大化、民間反革命の育成、刑法「政惡」、小選挙区制等々の全ゆる策動を具体化し始めている。この様な実態化を背景に、差別主義、民族主義、社会排外主義のイデオロギー攻撃を強化し、天皇制ファシズム的統治形態への転換を押しすすめ兼としている。

③正に、この革命と反革命の時代への突入は、プロレタリア階級の斗争を系統的に指導し、プロレタリア階級独裁・共産主義革命へ導く確固とした单一のプロレタリア革命党の創建を我々の緊要の任務として突き出している。連合赤軍敗北以降の革命翼の混迷、混乱は旧同盟一連赤総括論争の決着段階を踏み、その再編、統合を開始している。六〇年代に於ける革命的変化の限界、誤りを真に教訓化し、マルクス・レーニン主義の総路線を獲得する迄に我々は成長してき、この三年余りの苦汗に満た総括論争の中で育ててきたマルクス・レーニン主義を弾圧として防衛し、この革命党建設の任務を果さねばならない。そして、この総括一路線斗争の中で明確になり純化してき、急進民主義を粉碎し、プロレタリア革命党創建の大道へ突き進むことこそ、革命と戦争の時代を勝利の時代に導びく唯一の道である。

塩見一派との党派斗争の核心点

塩見一派と我々との対立は、党派斗争の核心は、小ブル急進民主主義を固守し、日本共産主義運動の発展を押し止めるのか、急進民主主義を清算しマルクス・レーニン主義の原則に従つて日本共産主義運動の発展を促進させるのかをめぐる斗いである。この間の総括論争・路線斗争の深化は、旧同盟という狭い枠での斗いから、革命的翼の再編・統合を射程に入れたプロレタリア革命党建設をめぐる斗いへと、この戦争の變を転化させている。それ故に、我々は党的決算にかけて塩見一派を粉碎し、日本共産主義運動の飛躍的発展を克ち取らねばならないのである。三年余りに渡る総括論争は、H・J公判斗争をその戦場としてほど結着づけられた。塩見一派は総括論争に敗北し、塩見の統一公判からの脱走・逃亡を開始し敗北を陰蔽するため、我々に対し「転向」「反革命」なるレッテル貼りに窮し、デマゴギーに転落してしまつてゐる。このデマは塩見一派の総括論争の敗北と塩見一派の政治的品位を傷つけるだけである。この総括論争の勝利的決着は、我々が前進し塩見一派が后退していること、我々のマルクス・レーニン主義路線獲得の才一歩を示すものである。旧同盟一連赤総括を正しく獲得することはマルクス・レーニン主義が急進民主主義かを示す才一の分歧点である。改めて言う迄もないが、塩見一派は連赤敗北を森氏個人の路線的敗北と把え、「死人に口なし」と十二名の同志達を利用し「獄中プロ革派」なるものをデッヂ上げ、旧同盟の破産を森氏や高原同志になすりつけ責任回避をはじめた。これは、旧同盟路線、就中塩見路線は一貫して正しく敗北していないと言つてゐるのであり、塩見の自己保身となり総括を放棄してしまつたのである。そして、旧同盟と連合赤軍を切り離し、連合赤軍を党的に総括せず、連合赤軍の清算をおこなつたのである。結果、塩見一派は全く総括し得なくなり総括を放棄してしまつたのである。そして、旧同盟と連合赤軍を保持していく総括の立場、觀点をも赤子と共に洗い流してしまひ、反動へ転落しばじめたのである。かかる塩見一派の無総括は、彼等の路線の性格をも規定している。我々と塩見一派との総括論争の勝利的決着は、綱領一路線斗争を急速に発展させ、党建設をめぐる斗いとして最終的段階へと凝縮しはじめてゐる。この綱領一路線斗争の核心は総括の内実を不可分とするマルクス・レーニン主義か修正主義かの二つの道をめぐる斗争である。つまり、思想・政治路線的には小ブル急進民主主義かマルクス・レーニン主義かであり、組織路線上に於ては、労働者のサークルを中心とする合法党建設か、職業革命家を中心とする体系的非合法党建設かをめぐる斗いとして、又戦術上に於ては大衆的カンパニアの経済主義路線か革命戦争路線かをめぐるものとしてである。前者が塩見一派の道であり、後者が我々の道である。

我々は塩見一派との党派斗争を、我々自身の総括の深化と進路確定に向けた党建設の重要な一環として位置づけ斗い抜かねばならない。プロレタリア革命党建設の重要な過渡にあつて、小ブル急進民主主義を温存させることは最早反動であり、その芽を一日も早く摘み取らねばならないからであり、しなびた過去の汚物を取り除き革命への道を掃き清めることこそ我々の総括であり責務だからである。

塩見一派の路線的破綻

塩見一派の連赤清算は無総括、総括の反動化は、彼等の路線的破綻をも刻印している。彼等の唯一の路線たる「階級依拠路線」は資本主義批判の把握そのものの誤り故に経済主義的純化を遂げ、プロレタリアートとの結合を実現し得ず破綻している。この「階級依拠路線」は、「下層プロ論」（七〇年代革命勢力論）に基づくもので

あり、彼等の唯一の党派性を示すものである。この路線は、彼等が六〇年代革命的左翼がつきつけた問題——その限界性を根底的に総括し得ず質的転化。揚棄を口先のスローガンでもつて隠蔽し、限界の克服を「下層プロレタリアートに依拠していかつた」という問題にすり替え、運動的后退の中では自らの任務を民主主義斗争に狹めた結果から導びき出されたものである。更に、思想問題——資本主義批判の欠如が「統一共産主義化」の極左路線をもたらし、思想問題——「党の共産主義化」を成し得ず、労働者就中下層プロレタリアートと結合できなかつたと総括する故である。しかし、資本主義批判をプロレタリアートの社会革命の不可避性、プロレタリア独裁——共産主義革命に於ける党とプロレタリアートの役割、手段、目的、条件、更には共産主義の指定の問題として理解できず、「資本主義批判」の核心を直接生産過程——工場内でのプロレタリアートの奴隸状態の暴露に一面化し、いわば資本主義の結果たる搾取・抑圧との斗いを共産主義プロ独運動と指定してしまった自然性へ全面的に押さえてしまうのである。つまり塩見一派の「資本主義批判」故に、彼ら等の「階級依拠路線」は党とプロレタリアートの相関関係を正しく把握できず、「共産主義と労働運動の結合」と言うテーマを最も右翼的に、小ブル的に理解してしまい労働者の最も右翼的な意識に結びつき経済主義路線として完結している。結局、塩見一派は目的意識性と自然発生性を正しく把握できず、共産主義と民主主義を「プロレタリア民主主義」と言う主観的概念で結びつけることにより、労働者階級の民主主義斗争、自然成長的な政治斗争をそのまゝ、プロ独運動と理解し、党をそれらの運動の指導部としてしまうのである。この見解は、臨總内党斗争に於て批判しつくされ臨總中央委員会が自己批判した経済主義であり、臨總頭目の八木がヘプロ革派の指導者として延命し得る路線的根拠を形成している。又、これらは塩見一派の「資本主義批判」の結果であるが、共産主義を「方法」とではなく「戦術」と把え、軍事力学主義——戦術主義へと不斷に陥り、戦術のエスカレートを運動の目的としてしまい、大衆運動への軍事性の付与を革命運動の発展とする。この結果、塩見一派の路線的本質が経済主義であるにも拘らず、一見「左」翼的に写り、彼らの口先の左翼的ボーズと二重写になりながら組織基盤を形成していくのであり、その階級的基本盤は、小ブルジョアジーの急進的奮激とプロレタリアートへのコンプレックスで凝り固つたポンコツ・インテリである。正に、塩見と八木は各々の正統な代表者であり、ヘプロ革の政治性格をも明確に示している。

塩見一派の「階級依拠路線」が資本主義批判の経済主義的把握の結果、何らの有効性をもたず逆に階級斗争を押し止める役割を果してゐることは先に述べたが、この路線自体、塩見流の「七〇年代革命勢力論」と言う政治主義的、小ブル利用主義の主張と、八木式「下層プロ論」（資本主義批判）の経済主義路線の折衷としてある。これではプロレタリア革命など全くの範疇外であり、「人民」一般が革命の主体とされてしまふのである。これは「国民社会」「下層」という連関での分析——「七〇年代革命勢力論」の支柱として理論的基礎を持つことにもなる訳である。

塩見は当初、政治利用主義的に「七〇年代革命勢力論」を主張していたが、以上の塩見流資本主義批判が定式化するに従つて、「搾取・抑圧の強度」の問題として「下層プロレタリアートが把えられてしまう。これではプロレタリア革命など全くの範疇外であり、「人民」一般が革命の主体とされてしまふのである。これは「国民社会」の経済主義的把握——「搾取・抑圧」論にある。つまり資本の拡大再生産、相対的・絶対的蓄積の結果としてのみでしか階級斗争の生起を措定できず、プロレタリアートを階級として措定しえないまま「搾取・抑圧の強度」の問題として「下層プロレタリアートが把えられてしまう。これではプロレタリア革命など全くの範疇外であり、「人民」一般が革命の主体とされてしまふのである。これは「国民社会」の経済主義的把握——「搾取・抑圧」論である。日本階級斗争の中にあつて、寄せ場労働者の斗い、被差別部族完全解放の斗い、沖縄人の斗いが如なる歴史性と斗いの蓄積。

起伏の道をたどつて今日の階級的位置を占めているのか。数十年いや数百年の斗争の蓄積を無自覚にも七〇年代に入つて階級斗争の最前線に踊り出でてきたから革命的だと主張しているのだ。六〇年代后半から連赤敗北に至る迄の我々の斗争の限界と誤りを無縫括に陰蔽し、七〇年代革命勢力との結合とか、階級依拠路線などと、もつたいぶつた言辞をはいても利用主義の本質は決してかくせない。六九年の斗争の中につて部落解放斗争の先頭に立つていた同志が権力の弾圧を全面に受けながらも同盟を防衛してくれたにも拘らず、同盟から離反していつた事やH.J.斗争後に於ける朝鮮総連への大弾圧、在日朝鮮人同志の我々への糾弾を如何に受け止めていたのか聞きたいし、真剣に総括して欲しいものだ。これらの諸同志の同盟との決別を「転向」とデマつてゆきの「七〇年代革命勢論」などは、差別主義と融和主義を増張させる階級和解の反動的役割しか果し得ないのである。他方、卑劣な八木はどうかと言うと、エセ・レーニン主義者よろしく「資本論」二三章、二四章を引用し、現代帝国主義に於ける階級対立を「帝国主義と相対的過剰人口（寄せ場労働者）の対立」と説くのである。すなわち現在の階級対立に於ける基本矛盾は帝国主義と寄せ場労働者の対立であり、寄せ場での斗争が不可避免に権力問題を含んだプロ独運動であると主張される。この結果、八木は党もプロレタリアートも肯定できず、寄せ場での斗争の爆発を権力斗争そのものと主張し、経済主義者の正体を暴露する。「資本の拡大再生産－蓄積過程は、資本の有機的構成を高度化し、社会的生産力を増大させ、生産手段に比較して労働力の比重を引き下げる一方他方では、労働を単純化し、婦人と児童を労働者の隊列に加える。また、多数の小商品生産者と小資本家を没落させ、農村を資本主義の市場に包摶し、農民を破産させ、労働者の隊列に加える。こうして一方では労働力に対する需要が相対的に減少し、他方では労働の供給は絶対的に増加する。その結果、失業者・産業予備軍が出現し、相対的過剰人口が出現する。この産業予備軍・相対的過剰人口の存在は、逆に、資本家が労働者を搾取するテコとなり、資本の蓄積のテコとなる。この様にして一方に、ブルジョア階級の側に富が蓄積され、他方にプロレタリア階級の側に貧困が蓄積され、經濟的隸従は強化される」と言う箇所を曲解し、「下層プロ論」の理論的基礎をここに求め、資本と相対的過剰人口（寄せ場労働者）との絶対的対立を公式し、寄せ場での斗争の勝利は、資本主義そのものの打倒であると短絡してしまう。八木自身混乱し何がなんだか判らなくなってしまった様だが八木式「下層プロ論」とはこんな代物である。この「論」に則つて八木は、民主主義者よろしく政治・組織戦略を「下層プロ依拠路線」として定式化するのである。八木自身認めている様に彼の「國家論」「党建設」の欠落故に日本革命の戦略問題に何ら回答を与えては昇天してしまい、現在的には才三世界解放斗争への合流論として革命論を完成してしまったのである。八木路線は結局のところ、寄せ場に於ける民主主義斗争、政治斗争に軍事性を付与させ、党を戦術指導部へと改編させてしまった。八木路線の結末は、九・一九釜ヶ崎に典型的に象徴され、八木民主主義・經濟主義路線の最後の帰結である。△プロ独派の諸君は、この八木路線を見抜けず、塩見一派をハテロリズムへの転落と批判しているが、これは当らない。彼等は、塩見と八木の間を隔ててゐるが、本質は経済主義に何ら変りはないのである。この塩見一路と八木路線の折衷たる△プロ革V式「階級依拠路線」は寄せ場労働者の党的密集の中で暴き出され、粉碎されてしまった。我々は最後の話に若干の手を借すだけで充分であり、山谷、釜ヶ崎斗争の総括深化を共有する作業こそ、我々の才一義的任務であると考える。

プロ武共斗の破綻と二つの道の斗争

我々は、「マルクス・レーニン主義」創刊号に於て塩見一派の△プロ武共斗路線を批判してきたが、現在このデタラメな△プロ武共斗がどの様な結末をたどつてゐるかを次に見ていく。この

△プロ武共斗は塩見一派の党建設路線、そしてこの党建設に下づく統一戦線戦術組織路線である。我々が綱領・路線の厳格な意志統一の下にプロレタリア单一党を体系的非合意として上から組織していくとしているのに対して、塩見一派が、戦術協定を軸に下から組織しての合法党建設を望んでいることを自己暴露しているに過ぎない。この△プロ武共斗が日本革命運動に混亂を持ち込み、日本革命運動の緊要の任務たるプロレタリア革命党建設を彼岸に追いやり、敵対し、△プロ武共斗の葉であり、組織問題から目をそらし、革命的△プロ武共斗の認識者集団に党を変質させるものであると我々は批判してきた。△プロ武共斗急進民主主義に拘泥し、大衆運動主義とテロリズムの間を右往左往する反動的路線であることを暴露し、粉碎しなくてはならぬ。文この組織路線が塩見一派の合法主義・解党主義を陰蔽する△プロ武共斗をたぶらかし、組織問題に思想問題と認識を対置し△プロレタリア独裁一共产主義革命を準備し、組織し、練り上げる階級斗争を実際に指導する能力を持つた革命党建設を放棄し、カクマル型の△オーナーに、毛沢東思想を支持なし評価し、実践の検証と綱領論争を通じて長期的に、又は短期的に△プロレタリア単一党を確認した諸党派、諸グループ、諸個人によって構成されるか、ないしこれを主体とする」という箇所がある。これは「毛沢東思想の支持なし評価」を党建設の基準に置いてる様であるが、毛沢東思想のどこを評価していくのかが全く明確になつていらない。つまりこれは、塩見の毛沢東思想の評価の内容を認めようと暗に言つてゐるのであり、言い換れば塩見自身を認めよと言つてゐるのである。△プロ武共斗の実践的運用は、△オーナーの基準として述べられてゐる。これが塩見一派の△プロ単一党的組織路線である。他方△プロ武共斗の実践的運用は、△オーナーの基準として述べられている。「…しかし反スターリン派や毛教条派とあらゆる段階、水準で共斗を排除せずその条件があり次第どんどん追求する」である。これは△オーナーの基準△思想基準を反古にして、基準のない野合をどんどん追求すると言つてゐるのである。実際、塩見一派は初期の段階では△オーナー基準を軸として塩見綱領「草案」の承認を唯一の基準として、無批判に受け入れることを強要していた。しかし△プロ武共斗の△オーナーの捻出が困難となり、天皇訪米をめぐり運動的高揚に遅れまいと野合を開始してしまつたのである。これは、△プロ武共斗の△オーナーの基準を組織路線とし、塩見一派が連合戦線党を下から追求し始めたことを実証的に暴露したいためではない。彼らの三層構造「陣型論」組織路線とは、マルクス・レーニン主義の単一党建設の道を放棄し、連合ブントの夢を再び模索し始める布石であつたのである。この安易ではあるが、最も危険な沼地への道は、彼等の連赤清算・無縫括、急進民主主義への反動的回帰への結果である。塩見一派のこの間の党建設の破産は、マルクス・レーニン主義の放棄を現実のものとして示してゐる。塩見のサビツいた「權威」を唯一の團結の軸としている彼等にとって食いつぶすべき遺産は底をつき、「臨終」を待つのみである。ありもしない過去の「名聲」に、夢よりも一度と、芝居づいた三文役者が、ワラをもつかむ氣持で「柳の下」に手を入れ、つかみ出したのが連合ブントと言う古ワラジだったのである。この三文役者、ワラジに勇氣百倍して、花道で「大見得」を切ろうとしたのだが、普段の節振がたり、ハイ耐のチドリ足故に最後の舞台からもスベリ落ちてしまつたのである。九・一六、九・三〇「戦術」でドジョウを狙つたのがザルは誰が使つてもザルである。痛めた腰をさすりながらセンペイ蒲団にもぐり込み、樂日には登場することすら不可能となり、今か今かと首を長くして戦役報告を待ち受けていた二五名の若き戦士達を失望のドン底にたたき込んでしまつた。△プロレタリア革命党建設の事業に敵対し、個人的中傷とデマで以つて若き戦士達をもあそぶ彼らの腐り切つた旧態依然の体質、思想を断ち切ることは、日本革命運動の前進にとつて避けられない斗争であつた。△プロレタリア革命党建設の道を放棄し、大ブシト構想と連合ブントへの道を選択した塩見一派の自崩は時間の問題であるが、△プロレタリア革命党建設の事業に敵対し、個人的中傷とデマで以つて若き戦士達をもあそぶ彼らの腐り切つた旧態依然の体質、思想を断ち切ることは、日本革命運動の前進にとつて避けられない斗争であつた。

り、日本階級斗争の明暗を賭けた斗いである。

我々は、塩見一派の組織路線とプロ武共斗のデータラメな性格とその破産をみてきたが、この党建設をめぐる斗いは、決して我々と塩見一派との正統派競いなどと言う狭い領域のそれではない。連合赤軍敗北以降の革命的翼の混迷を揚棄し、日本共産主義運動の行手を指し示す二つの道の斗争であること確認しておかねばならない。日本共産主義運動の緊要の課題としてプロ單一党建設が問われており、この間けきをぬって、いわゆる大ブント構想が再び頭をもたげ、潮流化し、急進民主主義の古い、現在ではもはや反動的地平に日本革命運動を押し止め様と種々の装を纏しながら再登場していること、その中核的核心を塩見一派が占めている故にこそ、塩見一派と徹底して斗い抜かねばならないのである。六〇年代后半に於て小ブル急進民主主義は、戦後民主主義のブルジョア城内平和を打ち破り、且本革命の進路を議会的改良や、漸次的構造改革ではなく、ブルジョア独裁を打倒し、プロレタリア独裁を樹立していかねばならないと指し示し、その斗いの最先頭に立ち、革命的役割を果した。しかし現在の、革命と戦争の時代にあっては、小ブル急進民主主義は、ブルジョア独裁に奉仕することはあれ、革命の側には何ら有効性を持ち得ず、逆に反動的性格を持つ。正に革命か反革命かの分水嶺は、マルクス・レーニン主義か、その修正かによって嚴格に検証される時代に突入しているのだ。革命派は、この基準を綱領一組織一政治の厳密な内容として確立し、マルクス・レーニン主義の総括線、ブルタリア革命党創建の道を着実に歩み続けている。そして現在的にはこの分水嶺が、連合赤軍問題に対する態度、及び党建設に対する態度として敷かれているのである。この分水嶺をめぐる斗いが塩見一派と我々の斗いの核心であり、党建設をめぐる二つの道の斗争として避けられない斗いとしてある。我々と塩見一派の連赤総括に於ける些細とも思われる相違は、綱領一組織一政治の百八十度の相違をはえでいる。つまり、我々が塩見一派と党建設をめぐつて非妥協的に斗い抜いているのは、我々が塩見一派から組織的に分岐してきたと言う我々の歴史性、組織性にあるのではなく、勿論それは断平として踏えておかねばならないが一塩見一派の無総括と急進民主主義路線の上で押すすめられていく所謂連合ブント構想がプロレタリア革命党建設上に占める位置、性格そして今后果すであろう反動的役割を見抜いているからである。そして、その傾向は益々拡大され、固定化されていかざるを得ないからである。塩見一派は現在、歴史の歯車を押し戻し、后退させる傾向・潮流を代表している。我々と塩見一派とのプロレタリア革命党建設をめぐる党のための斗い一党としての斗いは、明確にプロレタリア的と共産主義的な道・潮流と小ブルジョア的と急進民主的な道・潮流との斗争であり、「資本主義の道と社会主義の道」の二つの道をめぐる斗争である。塩見一派は、この間の世界一日本階級斗争、共産主義運動の苦斗に満ちた前進を反動的に洗い流し、問われているプロレタリア革命党建設の斗いをオ第二次ブント・連合ブントの焼き直したる大ブント構想へと雲散霧消させ、様としており、労働者階級とその斗いに対する裏切り、敵対の道を歩もうとしている。我々はその斗いがいかに困難ではあれ、真にプロレタリア独裁運動を組織しそれをプロレタリア革命戦争として領導しうる体系的非合法党建設に向けた、けわしい崖道を進んでいる。それはもはや互い競い合うことのない食うか食われるかの斗いであり日本共産主義運動の命運を賭けた斗いである。我々は一切の曖昧さを捨て去り、塩見一派を理論的、政治的に粉砕し、組織的・軍事的に叩きつぶす斗いをプロレタリア独裁の政治・組織路線の中に正しく位置づけ、革命堂創建の計画性の中で勝利し抜くことを表明しておく。

プロレタリア革命党建設の大道へ

塩見一派と我々の党派斗争は、かかる地平、課題を戦取し、旧同盟一連赤総括論争の決算を賭けた斗いである。又日本共産主義運動

を根底的に揚棄し、革命的前進を斗い取る上での不可避の行程である。塩見一派が旧同盟の歴史的・階級的地平から反動的に后退し、かの急進民主主義の沼地に日本共産主義運動を押し止め、その沼地に安樂死させ様とする全ゆる策動を粉碎することは、日本プロレタリアート・勤労大衆の共通の任務である。塩見一派がデマ新聞で悲鳴をあげている様に、全国の寄せ場、部落解放運動、学生戦線、沖縄解放運動及び救援戦線で次々と塩見一派批判の火の手が上り、大衆的反撃を受け、窮地に追い込まれている。塩見一派の利用主義。セクト主義に対する反撲からの「プロ革はダメや相手にするな」というつぶやきは今、明確な路線批判に昂め上げられ、党建設をかけた斗いとして展開されている。我々はこれらの斗いを弾圧として支持すると共に、その最先頭で斗い抜く。H.J公判斗争は、そのオ一の戦場である。総括論争に敗北した塩見は、我々の追撃を恐れ東京地裁に泣訴し、分離公判を願い出た。東京地裁は塩見の泣訴を受けて入れ翌日に職権分離を強行してきた。この権力の意図は明白で、オ一の戦場である。総括論争に敗北した塩見は、大菩薩破防法への併合を自ら願ったのかは明白であろう。我々は、この塩見一派の統一公判からの脱走・逃亡糾弾・地裁・検事の分離公判・逆転判決攻撃策動弹刻・斗争を組織し十月十六日に備えたのである。一ヶ月余りに渡る外遊から帰つたばかりの地裁・西川は自分がいつたい何をやらかそうとしたかも忘れ、法廷にのこのこと現われたのである。被告三同志の出廷拒否の貫徹で被告席は誰れもおらず、逆に傍聴席がうめつくされたのかは明白であろう。我々は、この塩見一派の統一公判から離れて、脱走・逃亡糾弾・地裁・検事の分離公判・逆転判決攻撃策動弹刻・斗争を組織し十月十六日に備えたのである。一ヶ月余りに渡る外遊から帰つたばかりの地裁・西川は自分がいつたい何をやらかそうとしたかも忘れ、法廷にのこのこと現われたのである。被告三同志の出廷拒否の貫徹で被告席は誰れもおらず、逆に傍聴席がうめつくされ開廷と同時に分離糾弾の嵐をまともに受け、十秒と法廷を維持できず粉碎され、すぐすと逃げ去つたのである。塩見・西川「連合」の策動は一瞬にして粉碎されたのである。一方塩見一派は早々と延外で粉碎され五階にすら登場することが出来ず、西川支援活動を全て放棄し、塩見「メッセージ」なるものを皇居の堀りに捨て去り逃げ帰つたのである。又塩見は東拘迄は我々の追撃が届かぬだろうととかをくくり、全てを西川に託し惰眠をむさぼつていたが、我々の糾弾の矢は東拘奥く深く塩見の心臓を打ち抜いたのである。我々は、十・十六の勝利的貫徹を踏み固め更なる進撃の地歩を踏み出すであろう。

このささやかな斗いは、プロレタリア革命党建設の政治・組織のオ一步である。この敗北に窮した塩見一派は三名の同志達に対しても「転向」「反革命」デマを流し始めている。この塩見一派の手口は中核派に敗北したカクマルが「謀略論」で失地回復を計ろうとしたのと全く同一である。この間の総括一路線斗争に敗北し、公判斗争から脱走。逃亡を陰蔽するための手口である。総括の破産を突きつけられ、論争すらも放棄し、中傷とデマで組織を維持している彼らの崩壊は時間の問題であり、下部からの意見書が繰り出していると言ふ。我々は彼らの戦線復帰を望まぬ訳ではないが、我々の要求と自己批判をかたくなに拒み続けていた塩見を統一被告団から放逐し抜き、我が隊伍の革命的純化を斗い取るであろう。

塩見一派は我々の二つの斗いが、党建設をめぐる斗いとして純化し、その分水嶺は既に明確になつてゐる。塩見一派の沼地への転落を救い得るのは唯一我々だけであつた。

合法主義、小ブル急進民主主義の反動的后退を続けていた我々は、この道を断ち、最後の鉄棺を必ずや彼らの頭上に振り降すであろう。

マニラ・シン・エイの上

革命と戦争の時代に於ける狭山斗争

革命と戦争の時代

①天皇訪米阻止斗争は、急進民主主義派の葬鐘を打ち鳴らし、革命戦争派の戦略的正しさを満天下に明らかにした。民主主義的政治斗争の発展・爆発に軍事性を付与する権力中枢への破壊戦が、口先の革命的空文句と裏腹に、国家権力に封じ込められ破壊した事を何度も確認しておこう。民主主義的政治斗争を組織する合法党の基本組織に軍事組織を付け加え中央委員会に中央軍を付け加える「二本足」路線では、政治警察のモールを突破しえないのである。ブルジョア階級独裁の個々の政策に反対する一時的な対立を反映する武装斗争を強行すれば、政治警察がセン滅にててくるので合法組織である党の基本組織・中央委員会がまず敗北し、次に軍事組織・中央軍が敗北する。地下プロレタリア單一党を目指す革命戦争派こそが、日帝の天皇制ファシズム的統治形態を粉碎し、プロレタリア階級独裁を組織できるのである。

②朝鮮情勢は、日一日と煮つまり、「革命と戦争」の時代に突入しつつある。この情勢はベトナム・インドシナ民族解放民主主義革命の完全勝利が切り拓いたのである。キッシンジヤ・米国務長官の訪中も、流にさおさすことができず、すごすごと帰途につかざるをなかつた。いや、アジアに於る民族解放斗争の前戦は朝鮮半島に移り、南朝鮮の反米・反日・朴打倒の民族解放斗争の前戦は朝鮮半島に移り、爆発寸前である。ブルジョア・ジャーナリズムは、この爆発から日本人民の目を、関心をそらそうとして、「南朝鮮は安定している」「朴政権は、まき返しに成功した」ととてマニアをとばしている。事実は、全く逆であり、朴政権は、日帝の援助によってからうじて維持されているだけなのである。日帝は、日帝の援助によってかろうじて植民地体制を防衛する為に朝鮮の南北分断体制と朴政権の維持・固定化に全力を集中し、北朝鮮に対し、共同侵略反革命戦争を発動させんとしている。首相三木が米国で発表した日・米・韓共同声明の「新韓国条項」、オバ回日韓定期閣僚会議『共同声明』三項、これらは、日米安保条約と米・韓相互防衛条約を結びつけ、日・米・韓の軍事一体化をかちとる反革命策動であり、共同朝鮮侵略反革命戦争の具体的準備である。

③「韓国」内のファシズム体制は、金芝河氏に無期懲役判決を下す事によって一層強化され、民族ブルジョアジーは沈黙を強制された。がくて、反米・反日・朴打倒の民族解放民主主義革命を遂行する能力を持つたプロレタリア階級と農民が歴史の前面に登場し、労農同盟を中心とした反革命策動を、前者の指導の下に結集しつつある。我々はこの斗争、この革命斗争を断固として支持せねばならない。

④南朝鮮では、民族解放民主主義革命が爆発寸前であり、この南朝鮮の革命情勢は、日本の情勢に連なり、既に端的に始まっている。革命情勢を深化させていく。これに対し、日帝は天皇制を政治の前面に登場させ、ブルジョア民主主義的統治形態から天皇制ファシズム的統治形態への転換をおしすすめ、安保体制下での帝国主義的支配・ブルジョア階級独裁をなんとか延命させようとしている。日帝の統治形態の上からの転換に、政策反対斗争ではもや対応できないのである。民主主義的政治斗争を組織する合法党の天皇制ファシ

ズム的統治形態への敗北は必至である。唯一、プロ独・共産主又革命の政治斗争、革命戦争が、天皇制ファシズム的統治形態を転覆させるのである。

安保体制と天皇制ファシズム的統治形態への再編

①日帝がブルジョア階級独裁を維持・延命する方策は、外に対し、朝鮮侵略反革命戦争を発動し、内に対し、天皇制ファシズム的統治形態を構築することである。敗戦後、「象徴」として延命した天皇は、敗戦前に較べ大巾に権力が制限され、天皇は直接政治にたずさわらず、「一定の国事行為をたんに自動的におこなうにすぎなくなつたが、ブルジョア階級独裁の危機の中で政治の前面に登場するや否や、「戦前も戦後もかわりない」と言い放ち、積極的にブルジョア階級の意志に迎合し、天皇ファシズム的統治形態の推進力としてふるまい始めている。天皇訪米は、ブルジョアマスコミを通じ、天皇の存在を人民に広くアピールし、天皇制ファシズム的統治形態の一大布石であった。

②然し、日帝の体制的危機は、確実に深まつており、端初的な革命情勢は、逆流に抗む、更に、大きなうねりになりつつある。資本主義は、全ゆる所でゆきすまり、人民の怒りはうずまき、独占資本、金融資本に対する斗いは激化している。プロレタリア階級の斗争は、被差別部落大衆・被抑圧少数民族・社外工・臨時工・中小零細企業の労働者などの下層を中心激化し、社「共」・カクマル等の経済主義・議会改良主義をのりこえつゝある。

③日帝は、プロレタリア階級を主体にした革命情勢の発展に対し、早急な天皇制ファシズム的統治形態の転換を目指し、治安体制の強化・議会の空洞化・行政執行権力の肥大化・右翼民間反革命の育成・刑法「改悪」・小選挙区制を急ピッチで具体化していく。こうした実態を背景に差別主義・民族主義が強化されている。松生丸事件を利用した民族排外主義・キャンペーン攻撃・在日朝鮮人の民族的民主的権利を奪う「入管法」攻撃・朝鮮総連非合法化策動等は、その証左である。また、昨年10月3日の反革命寺尾の「暗黒判決」は差別主義の強化以外の何ものでもない。日帝は、天皇制の前面化によつて権威主義の攻撃を仕掛け、日本人民とアジア人民・朝鮮人民との分断支配し、日本人民・自体を分断支配する排外主義・差別主義の攻撃を仕掛けている。この差別主義攻撃の中心が部落差別であり、部落差別の頂点が石川氏への無期懲役判決である。

④反革命寺尾は、無実の石川一雄氏に無期懲役・実質死刑判決を下した。石川氏は無期懲役判決を「これは、丁度江戸末期に封建身分制度が動搖し、下層大衆の台頭が動かしがたいものとなり、徳川幕府の政治支配が危機に直面していた時、身分制を鉄の如くに保持し体制的危機を克服せんがため、部落青年を殺害した一般民を「エタの命は町人の七分の一」と言つて免罪した北町奉行所の差別判決とい

全く同じようなものだと思ひます。この判決は江戸幕府の支配の危機の中で、私の本当判決は、まさにブルジョア独裁の危機の中で下されたものである」と鋭く分析している。まさしく石川氏への判決は、ブルジョア階級独裁の危機の中で下されたものである。

②ブルジョア階級独裁の危機に対し、ブルジョア階級は、徹底し、完成した差別主義・排外主義攻撃をしかけてくる。ブルジョア階級支配の道具である国家権力は、奈良「橋のない川」差別・弾圧裁判判決、矢田判決・八鹿高校差別糾弾斗争への差別・弾圧裁判を相次いで強行し、被差別部落大衆の糾弾権を統制し、あわよくばは奪取ろうとしてこの事によつて、普段に生起する差別問題を解決するのではなく反動的に固定化し、差別主義をおしすすめようとしているのである。「日共」宮本一派は、右翼や自民党とつるみ、部落解放運動への敵対をくり返していく。

③部落差別が一層強化・拡大している事に嘆いてはならない。ブルジョア階級が全体重を差別主義の拡大・強化にかけているのは、彼等の階級独裁の危機の表現であること、決して余裕ではないことをはつきりみてとらねばならない。部落解放運動におひかかつた國家権力。「日共」宮本一派・民間反革命をプロ独一共産主義革命と結合する中で、確実にはねかえし、この試練を乗り越えねばならない。勝利に向けたこの試練を乘り超えねばならない。

狭山差別裁判糾弾斗争と部落解放運動

寺尾反革命判決・無期懲役を弾劾す

①日帝は、体制的危機を深めていく。ベトナム・インドシナ人民の完全勝利は、日帝の経済侵略をおしとどめる同時に、斗う日本ブルータ・労働大衆に限りない勇気を与えた。爆発的に進行するインフレは、ブルータリア・労働大衆、とりわけ被差別部落大衆の生活を破壊し、旧来のままではやつてゆけない地点においつめた。斗いは不可避となり、独占資本主義に対する怒りは、全国津津浦々にわきあがつて階級独裁の危機を朝鮮侵略反革命戦争によつてのりきらんとしている。朝鮮侵略反革命戦争に向けて、国内統治形態の上から再編を計画し、天皇訪米を始め、その具体化に着手している。ブルジョア民主主義から新らたな統治形態への転換を策しつつある。日本階級斗争は、除除に内乱・内戦的様相を示しつつある。この内乱・内戦的様相の発展を誰よりも恐れているのは、ブルジョア階級である。昨年1月15日の「暗黒判決」・無期懲役判決は、ブルジョア階級の予防反革命攻撃である。被差別部落大衆を中心とする狭山差別裁判糾弾斗争は、全人民的政治決戦としの高まりと差別分断をとえて団結する巨大な運動の潮流をつくりだした。斗いは前進し、日帝の政治支配の要である差別分断攻撃を確実にはね返し、その国家の犯罪性を暴露した。ブルジョア階級は、斗いの前進に恐怖し、斗争を抑圧・弾圧し、ファシズムの下に屈服させようとしている。

昨年1月15日の反革命寺尾の石川氏に対する判決は、その為の一步であり差別主義の強化である。反革命寺尾が無実の石川一雄氏に、無期懲役・実質死刑判決を下した事は、ブルジョア階級が石川氏を先頭に斗う被差別部落大衆の弾圧・抑圧・差別に全重心をかけていく証左である。狭山差別裁判糾弾斗争は、増え重大性を帯び、全人民的政治決戦から階級的政治決戦に発展しつつある。ブルジョア階級の全重心をかけた反革命攻撃を打ち破らねばならない。寺尾判決は、

部落差別について一言もふれず、被差別部落大衆の命を何ともおもわぬ悪魔非道な「新たなる差別犯罪」である。寺尾判決を弾劾し、その肉をふくまれてゐる反革命性・ブルジョア階級性・差別性を徹底して暴露しなければならない。

②石川一雄氏は「寺尾判決の最高裁での爆碎と、独自に寺尾に対する階級的報復は絶対やりとげねばならない」と、いっている。我々はこれに連帶し、石川氏の意志を物質化せねばならない。吉田を裁判長に任命した最高裁判所体制は、「上告棄却・石川有罪」路線に

よつて、寺尾反革命判決を防衛・維持しようと画策している。ブルジョア法的には、無期懲役刑であることをもつて、最高裁への上告を書面審理のみで却下することが可能なのである。村上は、これを利用しようと考えているのだ。書面審理「上告棄却・石川有罪」路線を全民の斗う力で粉碎せねばならない。最高裁で寺尾反革命判決を「爆碎」するために事実審理と口頭弁論をかちとらねばならない。「最高裁をめぐる斗いの困難性」を理由に、かかる斗いを日和つてはならない。狭山斗争の現段階は、権力支配に手をかけ打倒していく斗いの地平を切り開いているわけがない。狭山差別裁判糾弾斗争・部落解放運動を解体せんとする最高裁村上体制を居住・職場生産点、学園等の日帝不断の斗いと公判ごとの糾弾の斗い、署名集会・デモとの結合によつて追いつめ、叩きつぶし、逆解体せねばならないのである。

③石川氏の敢斗精神を我がものにしなければならない。獄中生活十一年を強制された石川氏の苦斗を学び、決意を固め、寺尾反革命判決を弾劾し、上告審斗争に勝利し、石川氏を奪還せねばならない。部落解放運動と社会帝国主義集団との斗いに打ち勝つ部落解放運動が構築されねばならないのである。石川氏は「部落解放運動が階級的に発展するや、必ず警察権力の反革命的差別の弾圧にあり差別裁判を通じて部落差別が法制的に固定化され、部落差別の法的固定化に基づいて更なる弾圧が準備されるというように部落解放運動の革命的発展。完全解放にとつて警察・司法・監獄・軍隊といった官僚的軍事的統治機構の解体は不可避は課題であり、融和主義の突破の鍵もここにある」と、いっている。

部落解放運動の現段階

①部落解放運動は、ブルジョア階級の重心的攻撃を受け試練にさらされているが狭山斗争・八鹿斗争を頂点に、融和主義と非妥協的に斗う一方、同時に、労働者・学生との共同斗争を推進し、末だ高い戦斗性を維持している。天皇制ファシズム的統治形態への策動の中で、この高い戦斗性は、飛躍・質的転換が問われている。帝国主義と社会帝国主義集団との斗いに打ち勝つ部落解放運動が構築されねばならないのである。石川氏は「部落解放運動が階級的に発展するや、必ず警察権力の反革命的差別の弾圧にあり差別裁判を通じて部落差別が法制的に固定化され、部落差別の法的固定化に基づいて更なる弾圧が準備されるというように部落解放運動の革命的発展。完全解放にとつて警察・司法・監獄・軍隊といった官僚的軍事的統治機構の解体は不可避は課題であり、融和主義の突破の鍵もここにある」と、いっている。

明らかに、石川氏は、部落解放運動が、国家権力に手をかけ、引き倒す斗い・官僚的軍事的統治機構を解体する斗いを準備し、組織し、実践する陣型を構築すべき必要を説いている。然し戦斗的民主主義斗争から権力斗争への転回軸は、民主主義斗争の延長上には決つて存在せず、テロリズムに陥る。共産主義と結合しない限り、転回はかちとれずに終る。「解放理論は部落差別をなくす闘いであることを明らかにした。そして同時にまた、この闘いが社会主義をめざす闘いと固く結びついていることを示している」(『部落解放』)と意置づけられる解放理論の内実が発展されねばならない。つまり、被差別部落大衆自身の部落解放の闘いは、差別そのものである貧困・屈辱・隸属に対する斗いであるとする小ブルジョア的資本主義批判を清算する事が問われているのだ。貧困・隸属・搾取は、ブルータリア階級が労働手段・生活手段の全ゆる源泉をブルジョア階級に搾取され、経済的に隸從している資本主義的生産様式の結果であり、結果に対する斗いは、事態を根本的に解決する斗いではなく、民主主義斗争でしかない。全ゆる搾取と貧困・精神的隸屬の基礎にブルータリア階級の経済的隸從があること、ゆえに、今日の権力斗争は、プロレタリア階級の経済的隸從からの解放にむけたブルータリア階級独裁の樹立の斗いである。小ブルジョア的資本主義批判を清算し、マルクス・レーニン主義的資本主義批判と結合することによつて、石川氏の提起は物質化され、「日共」宮本一派との斗い・政治警察・

が部落差別の直接的現実と斗うことなしに、部落解放は、他のだれ斗争を否定するものではない事はいうまでもない。被差別部落大衆が部族差別の代行されないのであり、貧困と搾取、抑圧と差別と斗い、斗争を続けねばならない。そしてこうした斗いで打ち駁えられた團結を共産主義との出合いの中では、革命的團結に高めあげること、このことが今日の部落解放運動に根柢的に問われているのだ。

②「日共」宮本一派は、部落解放運動の打撃対象である。彼等は、「石川氏」有罪を主張し「狹山事件は元罪事件でなく兇悪な殺人事件」と述べ、寺尾反革命判決を支持し、石川氏と狹山斗争に公然たる敵対宣言をした。「日共」宮本一派は、八鹿高校差別事件を計画し、解放同盟が「暴力集団」であるかの如き反革命デマ宣伝を大々的に行ない、いまや福岡県中間市における全日本同和会の融和主義的分裂策動を、ためらうことなく支持したとおり、「自民党の別動隊」¹全日本同和会と結合し、「国民融合を進める全国会議」を結成し、反革命差別者集団に一層純化している。議会主義・経済主義への無限地獄におちた「日共」宮本一派は、部落解放運動の前進を心底恐れた。部落解放運動の前進と転回は、プロレタリア階級独裁—共産主義革命・革命戦争を不可避的な、さけてとおれない政治的な課題とし、必ず「日共」宮本一派の日和見主義・社会帝国主義を暴露するのである。それゆえ、彼等は、部落解放斗争が体制内改良主義・経済主義の枠におさまらないとみるや狹山共々から逃亡し、ありとあらゆる手段をつくし、「解同」暴力集団の反革命キヤーベーンの挙にでたのである。

「日共」宮本一派は、彼等の部落問題をまとめた「今日の部落問題」で差別部落大衆を「被害妄想狂」に仕立てあげ、資本主義を美化した。今日、資本主義美化論は完成され、部落差別は資本主義に於いて自動消滅すると規定された。「民主連合政権」の実現に向けて社帝集団²「日共」宮本一派は、日帝の朝鮮侵略反革命戦争と斗わず逆に、これと斗う部落解放運動と革命的共産主義諸組織に敵対しているのである。社会帝国主義³「日共」宮本一派をセン滅しなければ、部落解放運動が勝利の道をすむ事はできない。カクマールも、「日共」宮本一派と同様である。未だ、本質を被差別部落大衆の前に外化していなければならぬとみるや狹山共々から逃亡しての本質を徹底的に暴きださねばならない。

共産主義と部落解放

①この項で「共産主義と部落解放」の連関について簡単にふれておく。部落差別は、封建制に於ける身分差別が資本主義に於て存続し、拡大再生産された。資本主義的生産様式は、プロレタリア階級のブルジョア階級への経済的隸従を基礎にして資本家が労働者から剩余额値を搾取し、更に、搾取した剩余额値を資本に再転化し、より大きな規模で労働者を搾取する。この資本の拡大再生産—蓄積過程は、資本の有機的構成を高度化し、社会的生産力を増大させ、生産手段に比較して労働力の比重を引き下げる一方、他方では、労働を単純化し、婦人と児童を労働者の隊列に加える。また、多数の小商品生産者と小資本家を没落させ、農村を資本主義の市場に包摂し、農民を破産させ、労働者の隊列に加える。こうして、一方では労働力に対する需要が相対的に減少し、他方では労働の供給は絶対的に増加する。その結果、失業者・産業予備軍が出現し、相対的過剰人口が出現する。この産業予備軍・相対的過剰人口の存在は、逆に、資本家が労働者を搾取するテコとなり、資本の蓄積のテコとなる。このようにして一方に、ブルジョア階級の側に富が蓄積され、他方にブルレタリア階級の側に貧困が蓄積され、経済的隸従は強化される。帝国主義段階の資本主義に於て独占資本と銀行が結合した金融寡頭制支配によりブルレタリア階級を最大限搾取し、腐巧性と寄生性が強行され、独占資本・金融資本が急速に形成された。農民の分解、労働者階級への合流によつて膨大な相対的過剰人口が形成され、ブルレタリア階級の側に貧困が膨大に蓄積された。部落は、相対的過剰人口・労働者階級の側に蓄積された貧困の集中的表現として資本主義的生産様式が拡大再生産している。具体的にいえば、被差別部落大衆が、資本主義の主要な生産関係から排除されるという差別を

さす。独占資本は勿論、中小零細資本や被差別部落大衆を差別によって雇用せず、労働市場の底辺に置き、一般労働者を過酷な条件で搾取するテコとしている。政治的な問題としても部落差別は重大な意味がある。ブルジョア階級独裁は、プロレタリア階級に対する、人民に対する分断支配を不可欠としている。以上述べてきた如く、部落差別と資本主義的生産様式・ブルジョア階級独裁とは不可欠であり、部落解放は、最小限細領の問題ではなく、プロ独立共産主義革命によつてのみ完全に達成されるのである。

②部落解放運動は、プロ独立期・社会主義期を通じて存在する。プロレタリア階級が経済的隸従からの解放の条件を形成し、階級としての自己を揚棄する時、部落解放運動の物質的条件はなくしてゆかねばならない。継続社会主義革命によつて部落完全解放の斗いは鍛え上げられるのである。

階級独裁の社会革命に於いて部落解放運動は中核。推進力にならねばならない。被差別部落大衆と一般大衆の差別をなくしてゆかねばならない。プロ独立共産主義革命によつて部落完全解放の斗いは鍛え上げられるのである。

①部落解放運動が権力問題にぶちあたり、この壁を何としても打ち破ろうとしている中で、小ブルジョア急進民主主義派は何一つ指導力を發揮できずにいる。資本主義的生産様式の結果に対する反抗を共産主義と考え、合法組織に軍事性を付与する組織觀にとらわれてゐる限り、指導力が發揮できないのも当然だといえる。権力の厚い壁は、プロ独立共産主義革命の革命戦争によつてのみ爆碎可能なのである。マルクス・レーニン主義で武装しない限り革命党ではないし、権力も組織しえないのである。マルクス・レーニン主義で武装した地下党との間で開始される。ゆえに党的指導機関、特にニン主義で武装した地平单一党によつてのみ可能である。

②革命戦争は、ブルジョア階級独裁か、プロレタリア階級独裁かの絶対的な対立を反映するセン滅であり、まずもつてブルジョア階級独裁の軍隊・政治警察へ及びその別動隊たる民間反革命・社会帝国主義集団⁴とプロレタリア階級の前衛であるマルクス・レーニン主義で武装した地下党との間で開始される。中央委員会が政治指導だけでなく軍事指導も行わねばならず、その様なものとして党中央は建設されねばならないのである。小ブルジョア急進民主主義派は、石川氏の提起を正面きつて受けとめることができず、権力斗争願望論をふりまわすだけである。唯一、革命戦争派のみがこの提起にこだえることができるのであるし、勝利しえるのである。

マルクス・レーニン主義の旗の下、地下單一党を建設せよ

全国の斗う労働者人民諸君 救援戦線の友人諸君

H. J. H. J. H. J.

塩見が『声明』を発表している。これは塩見の悲鳴と泣訴である。警くべきことに、塩見は地裁に對して「私が分離するか否かは、私自身に決定権があるのであって、裁判所がトヤカクくちばしをさしはさむ事ではありません」と申し入れている。統一公判を要求するのではなく、分離公判を前提とし、そのやり方について、魚心と水心の関心でボス交しているのである。これは8・21公判で公然と分離公判を要望したことの延長である。それだけではない。塩見は8・21公判以前から被告團・弁護團にもこつそり隠して、よど号H・J公判からの分離、大菩薩防護法公判への併合を地裁と交渉していた。塩見の基本戦略は分離公判への脱走、逃亡である。この脱走、逃亡をカムフラージュするために、デマをとばし、悲鳴をあげ、わめいているのである。一体塩見は、統一公判の持つ階級的意義について如何に考へてゐるのか? 又、それがこれ迄の階級戦士が、どれ程の血みどろの斗いによつて斗い取られてきたものであるのかについて、少しでも知つてゐるのか明らかにしてほしいものである。もしそれらについて何の認識も持たずにはかかる泣訴をしてゐるとしたら、その一点に於いて反動的、否、反革命的であり、かかる無知蒙昧は即刻あらためてもらはねばならないであろう。

塩見は、「新清算主義者」(我々のことらしい)「が、統一公判を破壊した以上……分離するか否かの判断は私にある」と言つてい。塩見は、(1)「日韓米反革命体制の暴露」、(2)「アジア共産主義との結合」、(3)「人民戦争と人道主義の原則に立つた作戦遂行と乗客の処遇」、(4)「フレーム・アップを含んだ反革命攻撃であり、四人は全く無罪である」の四点を手前勝手な内容で提起し、我々がその内容に同意しないから分離公判へ脱走、逃亡すると言つてゐる。

(1)は主要に金浦空港問題であるが、塩見の場合、よど号H・J、「国際根拠地建設論」に、まれでいた朝鮮人民を日本革命に利用しようとした誤まりを陰蔽するため、朝鮮人民の存在がすつぱりと抜け落ちている。だから日本帝国主義に対する日本人民と朝鮮人民の関係を突き出せず、米日韓侵略反革命軍事体制を有効に暴露できないのである。(2)について。田宮同志たちは、金日成首相(当時)への手紙で次のように言つてゐる。「我々は、日本人民のため、日本革命のため、全てを捨て尽すといふ態度を持つておらず、又日本の方労人民の苦しみがどういうものであり、彼らとどう結びついて、どう斗うか……がよく解つておらず、それ故、世界的に結びついた帝国主義の反革命に抗して、一日だけでプロレタリア独裁を樹立することが不可能に思えていたのです。首相同志の限りなく寛大で革命的な御指導を受ける中で、我々はようやく首領一党一階級一大衆の結びつきが如何なるものであり、プロレタリア独裁権力の力の根源がどこにあるのか、そして、それがなぜ社会主義、共産主義を日指した力になるのかを知ることができるようにになつてきました! 田宮同志たちは、朝鮮人民、朝鮮労働党を結合し、マルクス・レーニン主義を獲得したことによつて、よど号H・J、「国際根拠地建設論」に、まれでいた日本人民を信頼していなかつたことと、安易な国外への逃亡を自己批判している。田宮同志たちは、日本人民に依拠して日本革命を斗う立場に立ち、よど号H・J、「国際根拠地建設論」を自己批判的に総括することによつて、マルクス・レーニン主義を獲得し、朝鮮人民、朝鮮労働党と結合している。我々が田宮同志たちの自己批判的総括を主体的に把え返し、公判斗争を斗争中でよど号H・Jの総括を深め、発展させ前進したのに対し、塩見は一面的、部分的な総括に固執し、とり残され反動的に後退しているのである。その結果、塩見の総括は田宮同志たちと対立し、我々と対立することになつてゐる。(3)について。我々が一体どこで、よど号H・J遂行中の「人民戦争と人道主義の原則」を否定してゐるのか? デマである。我々は、よど号H・Jが完遂された結果を踏まえて、その上で乗客、乗務員に對して協力と好意的中立を感謝す

る意味で迷惑をかけたことを陳謝してゐるのである。しかも、これは「ソウルからのアピール」に明らかなように、田宮同志でもある。

又、このことは、公判斗争に於いては、乗務員に對して金浦空港問題での日帝への加担を糾弾するための布石である。塩見は、乗務員に對する感謝と謝罪の意を表明することが、H・J公判斗争の立脚点の破棄であり、「転向」だと言つてゐる。これもデマである。乗客、乗務員に感謝と謝罪の意を表明することは、公判斗争の意志と朝鮮へ行つた九人の意志として、感謝と謝罪の意を表明してゐる。公判斗争の確認事項である。この確認事項に従つて、既に72年12月19日の公判に於けるスチュワーデスに對する反対質問で、被告團の意志と朝鮮へ行つた九人の意志として、感謝と謝罪の意を表明してゐる。公判斗争の確認事項を今になつて投げ捨てているのは塩見である。更に我々は、人民戦争の戦術として、H・J一般を否定して渡して助命嘆願しようとした。それは反革命的な自供の継続であり、組織を解体することによつて自分の無罪を獲得しようとするとある。当然「田宮独走説」は被告團内部で阻止された。塩見は今も「田宮独走説」で、田宮同志とよど号H・J斗争を敵、日帝権力に売り渡して助命嘆願しようとした。それは反革命的な自供の継続であり、組織を解体することによつて自分の無罪を獲得しようとするものである。田宮独走説で、田宮同志とよど号H・J斗争を敵、日帝権力に売り渡して助命嘆願しようとした。それは反革命的な自供の継続であり、組織を解体することによつて自分の無罪を獲得しようとするものである。当然「田宮独走説」は被告團内部で阻止された。塩見は今も「田宮独走説」を撤回せず、卑劣な裏切り行為を行なおうとしている。又塩見は、地裁の長期勾留攻撃に屈服して、検察側申請の乗客証人全員の検事調査に同意して、保釈を嘆願しようとしている。分離公判への脱走逃亡はその布石である。要するに、塩見は被告團内部で自分の日和見主義方針が粉碎され、孤立したので、自分の日和見主義方針を実行するために、個人的利益を求めて統一公判を破壊し、分離公判へ脱走逃亡しているのである。

塩見の総括の方法論は形而上学である。総括は正しい側面と誤まつてゐた側面を區別し、両側面から考察を深化しなければならない。これは対立物の統一である。ところが塩見は正しい側面の、しかもその一部を少化して主張するだけで、誤まつてゐた側面を居直り、自己保身と責任転嫁に置き換えてゐるのである。我々は正しい側面を繼承し発展させていくとともに、誤まつてゐた側面を分析し、誤まりを克服していくなければならない。我々は前人未踏の革命をやつうとしているのであり、誤まりを犯すことは不可避である。誤まりを犯すことは正しい路線形成の必要条件である。正しい路線とは、誤まつた路線との斗争の中で形成される。誤まりがすべて避けられる、正しいものだけで、誤まりはないといふ観点はマルクス主義に反する。問題は誤まりを認め、自己批判し、誤まりを克服して正しい路線を獲得することであり、誤まりを少なくし、小さくしていくことである。正しい路線はこうして発展し、新しい実践に向かうのである。ところが塩見の総括は、成果は一人占め、誤まりは責任転嫁と居直りでしかないので、発展がなく、とり残され、反動的後退となり、流れない水が腐るのと同じように腐敗し、墜落していくのである。

塩見のデマコードぶりは、よど号H・Jに限られない。『声明』では「オ一次、オ二次赤軍派が小ブル革命主義、小ブル急進民主主義であつたことを認める」と言つてゐるが、同時に発行された『新清算主義批判』なるパンフでは、全く逆に「ブンド赤軍派の主要側面としてのプロレタリア性、マルクス主義性」と言つてゐる。塩見は急進民主主義をスロリズムから一転して経済主義として延命している。だから連合赤軍からの脱走逃亡を扇動し組織した八木と结合しハプロ革派を形成してゐるのである。

全国の斗う労働者人民諸君 救援戦線の友人諸君